

山伏弁円寸劇台本

キャスト

ナレーター
親鸞聖人
お弟子
山伏弁円（明法坊）
山伏の弟子
さる

ナレーター

親鸞聖人が、お念仏の教えを弘めに、関東にやって来てから、関東の地では、迷信や祈祷を信じる人が少なくなってきました。祈祷を生業としていた、山伏は、客をとられた気がして、親鸞聖人に敵意をもった者も少なくありませんでした。親鸞聖人のお住まいの稲田から一里ほどの板敷き山に居た山伏弁円もその一人でした。話をしていた山伏弁円が、どうやらこちらにやってくるようです。（ナレーター、弁円の反対の方に消える）

一幕（板敷き山の中、弁円とその弟子、歩きながら登場）

弁円 「なに、何、今日、あの憎らしい親鸞が、この道を通るのだな！」

山伏弟子 「はい、お師匠さま、村の者に聞いた話によれば、柿岡の村の者が親鸞の話を聞きたいと招き、親鸞は朝早くそちらに向かわれました。帰りの稲田には、この道を通って帰ると思われます」

弁円 「そうか！良い話を聞いた。憎い親鸞。親鸞が来てから、わしの話を聞く者や、加持祈祷にやってくるものが、ほとんど居なくなってしまった。商売あがたっりだ。帰り道、待ち伏せして、道の上から、大石でも落として、殺そうぞ！弟子ども、油断するな！しっかり仕留めるぞ！」

山伏弟子 「はい、分かりました」

（大石を転がすしぐさをする。そして、ここらのかげに隠れるぞと言って隠れる。大石が、ころがって下敷きになる予想練習のまねを、弟子としてみてもよい）

（反対方向から親鸞聖人とお弟子が登場）

親鸞 「今日は、熱心に話を聞いてくれるので、遅くなりました。道も暗くなってきましたので、急ぎましょう！」

お弟子 「親鸞様、お気を付け下さい！お疲れの上、この辺は、山伏の修行場。何やらいやな噂を、耳にしました。山伏弁円の一党たちが、逆恨みを抱いて、命をねらっているという話でございます。」

親鸞 「いや、なれた道ゆえ、たいしたこともないし、山伏弁円も話合いをすれば

誤解も解けるだろうよ！」

(石がころがり落ちる場所の少しまえに来て、親鸞・お弟子立ち止まる。サル登場)

お弟子 「ほう、サルが出てきた。」

親鸞 「珍しく、人を怖がらぬサルじゃな」

お弟子 「お師匠様の話がききたいのかな？」

(サル、行きてを阻む)

親鸞 「はて、とおせんぼしては困る。道をあけておくれ！」

(サル、キッキ、キッキと騒ぐ)

親鸞 「ほう、違う道を案内してくれるのかな。いつもの道とは違うのだが。あま、まあよい。たまには、おさるに道案内してもらいましょう」

(サルに道案内されて、山伏弁円の反対側の方に、下がっていく)

山伏弁円 「はて、おかしい。たしかに念仏のこえは聞こえるのだが。あらわれない。何時になったら、現れるのだろう」

(山伏弟子、急いで入ってくる)

山伏弟子 「お師匠さま、大変です。親鸞め、いつのまにか山を下って稲田に帰りましたぞ」

山伏弁円 「なに！逃げたか？無念！でもどうし、ここを通らなかったのだろう？不思議なことだ。この上は、稲田の草庵に乗り込み首を刀ではねてくれるぞ」

(山伏弁円、山伏弟子、いきりたって去っていく)

二幕(稲田の草庵、山伏弁円登場)

山伏弁円 「ここが、稲田の草庵か？思ったより小さい家だな！ やい、親鸞は、おるか？弁円が、まいった。であえ！！」

(反対の方で親鸞・お弟子登場、お弟子は震えている)

お弟子 「はやく、お逃げになって下さい。命をとりに、弁円がやって来ました」

親鸞 「なにも、そんなに怖がることはない。どうれ、まいりましょう！」

「はあい、そんなに大声で呼ばなくても聞こえていますよ」

「弁円どの、よくおいでなった、わたくしが親鸞です。」

山伏弁円(おどろいた様子で)「おまえが、親鸞か？近頃、念仏を称えて人をだます、親鸞よ！わしの法が、なにゆえ念仏に劣るのか、さあ聞こう！」(いきり立つ)

親鸞(冷静に)「わたしは、人の修行を悪く言ったことは一度もありません。山に登るのも色々な道があります。それと同じように、人は、それぞれの道によって修行されるのもよいことでしょう！」

「わたしのような欲の深い者にとっては、念仏だけが、わたしを救ってくださる、道だと信じ、人にもそれを伝えているだけです」

「さあさ！こんな玄関口での立ち話もなんですから、どうぞお入りになってゆっくりお話をいたしましょう！」

(弁円、怒って興奮していたが、親鸞聖人の話を聞きながら、うなずき、段々落ち着いてくる)

弁円 「う～ん、わしは、ばかだった」

(弁円、手をつきながら)

弁円 「わたくしは、思い上がっておりました。自分の力も知らず、人をにくむとは、何と、愚かだったのでしょうか！」

親鸞 「弁円どの、まず、お手をあげられよ」

弁円 「聖人のお心を知って、迷いの夢がさめました。どうか、この弁円を、お救いください！お弟子にしてください！お願い致します」(山伏の格好を脱ぐ)

親鸞 「わたしには、弟子は一人もありません。みんなおなじお念仏の道に生きるのもだちです。弁円どのも、今日から親鸞の良き友です。」

弁円 「ああ、有り難い、そのお言葉。私は良い方に、巡り会いました」

(親鸞、弁円、静かに去る。ナレーター登場)

ナレーター

こうして、親鸞を憎んでいた弁円は、親鸞聖人の真に、人を思いやり、念仏の道を勧める姿に感動し、たちどころに、山伏の姿を脱ぎ、親鸞聖人のお弟子となりました。名前を改めて、明法坊^{みょうぼう}と名のられました。おや、弁円いや今は明法坊の一行がやって来ました。

(ナレーター、下がる)

明法坊 (一緒に歩いている山伏の弟子に向かって)「念仏はほんとうに有り難い教えだ！みんなもよく考えてくれ！」

山伏弟子 「それほど、お師匠様がほめるなら、立派な教えにちがいはないまい。私たちもお弟子になりましょう！」(山伏の格好を、弟子脱ぐ)

明法坊 「聖人をいのり殺そうとした、この板敷き山で、今はお弟子になって念仏を称えるとは不思議なことだ！一句詠めた。山はむかしに変わらねど かわりはてたる わが心かな」(明法坊弟子みんなで、お念仏を称える)

終わり